日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP) 関東

私とコロナ禍

文は信なり

２０２０年　初冬号　４１号

発行責任者
三浦喜代子（代表）
事務局
〒131-0043
墨田区立花 4-6-13
090-6504-7669
振替 00170-0-61838
HP: http://jcp.daa /

【目 次】P1　三浦喜代子　P3 篠田一志　奈良ノリ子　P4　槇尚子　P5　駒田隆　P6　長谷川和子　P7　本田真貴　P8　三浦喜代子　P9　西山純子　P10　山本千晶　P11　山角正子　佐藤晶子　P12　山本披露武　P13　安東奈穂美、島本耀子　P14　山本悦子　P15　長谷川和子　山本悦子　P16　編集後記・篠田一志　三浦喜代子　JCP 紹介

疫病とキリスト者　歴史を振りかえって

三浦　喜代子

二〇二〇年春先から、新型コロナウイルスと呼ばれる人類初のウイルスによる疫病が、世界規模で流行り、十月末の時点で感染者数は四〇〇〇万人、死者は百万人を超えたと報じられている。

疫病つまり伝染病は人間やその他生き物がいるところには必ず発生した。有史以来人類は疫病と闘いながら生きてきたといえる。

聖書にはいつくもの疫病が登場する。

『出エジプト記』に、モーセは神様の命によってエジプトに一〇の災いを起こすが、その一つに疫病があり、多くの家畜が死んだ（九章）。民数記には、うずらの肉をむさぼっていた民は疫病で死んだとある。

まだ、多くの例がある。明らかに伝染病である。

時代は飛ぶが、教会時代に入り、紀元三世紀のころの興味深い記事を見つけた。

コロナ自粛の中で本を読む時間が増え、多読、雑読を楽しんでいるが、まるで天使が置いていったかのような一冊に惹かれ、繰ってみた。『カタコンベの教会』（聖文社一九六八年）である。

かなり前に、聖地旅行の一環でローマに寄り、アッピア街道沿いにあるカタコンベに入ったことを思い出した。

ひとつの記事に目を瞠った。

三世紀の中頃、カルタゴとアレクサンドリヤで悪疫が流行した時、キリスト教徒がいかに病人を看病したか、その愛の行為について、アレクサンドリヤの教会の監督が語っている。

「兄弟の多くは・・・・身の危険をもかえりみず病人を訪問した。ほとんどの者は、他人から病気をうつされた時も、その人とともにこの世を去ることを喜んだ。かれらは死体を安置し、沐浴させ、屍衣で包んだ。しばらく経つと、彼らもそれと同じ扱いを受けた。

異教徒は、病気の者を見捨て、最愛の者でも遠ざけた。彼らは瀕死の者を顧みず、死体をけがれたものとして扱った・・・」

このエピソードは古代の歴史家エウセビオスの『教会史』に記されているという。この悪疫が何であったかはわからないが、歴史上一番大きな被害をもたらしたのはペストであろう。

ペストは過去三回大規模に流行（パンデミック）したという。三回目の流行をベースに、アルベルト・カミュが小説『ペスト』に著し、不条理という思想を強調した。今、コロナ禍の中で再び読まれている。

私の関心は二回目の、中世ヨーロッパでの大流行である。このペストは黒穂病と呼ばれ、ヨーロッパの人口三分の一、あるいは半数が死亡した史上最悪の大規模なものだった。

一三四七年のある日、地中海に停泊していた大型帆船の乗客や荷物と一緒に上陸したネズミに付着した病原菌を持つノミから、感染が始まったという。ここだけでなくあらゆる港でいっせいに始まった。感染は猛烈なスピードで北上し、およそ半世紀の間、波はあるものの猛威を振るった。死者は七千万、あるいは八千万人と言われる。しかしそれ以前から始まっており、正確な始まりも終わりもだれにもわからない。今のコロナでさえ、起源はどこかと争っている始末である。中心期間は一三四七年から五三年と言われる。

『ペスト大流行』(岩波新書)を拾い読みしている。三五年も前の書である。「序」の一文が深く心に留まった。

「一体何があのような激烈な流行を惹き起こすのか、また一体何が相応の犠牲者を要求したあと自然に終息へと向かわせるのか、と言う点に、明確な解答を与えることは難しい」。

カミュならそれを不条理と呼ぶのだろうか。私はそこにこそ条理、神の意志があると信じる。もちろん神の意志が何かは愚人の私が知るところではない。カミュは無神論者であったという。

歴史が危機を迎えると、必ずと言っていいほどユダヤ人の迫害が起こる。この時も例外ではなかった。病気の原因がわからない時、人は恐怖に駆られて日頃から排除したいと思っている弱者や貧者や異文化の人たちを標的にする。

ユダヤ人が井戸に毒薬を入れたとのうわさがスイスのジュネーブから立ち、たちまちゲットー(ユダヤ人集落)が襲われ、虐殺が起こり、ペストと同じほどのスピードで全ヨーロッパに広がったという。第二次大戦下でのナチスによる迫害を思い出す。理由は全く違うけれど。

一方で、人々の行動に二種類のパターンが見られた。

一つは、明日をも知れない命なのだからと、享楽に走る人たちがいた。もう一種類は正反対の人々だった。この疫病は神の忠告、さばきだと悟り、救いを求めて善行に励み、熱心に教会へ励むようになった。教会や慈善団体には驚くほど多額の献金が寄せられた。

さらにペストは当時の社会の形を根本からゆすり動かし、中世封建時代の幕を下ろす働きをしたという。

今、二一世紀開幕のこの時、地球上の隅から隅まであますところなく走り回るコロナ禍は、何をしようとしているのだろう。疫病のただなかに、創造主である「歴史の意志」、「彼の物語」が進められていることは、誰しもがそっと気付いていることだろう。

ペストがフィレンツェで猛威を振るった時の様子を作家、ボッカチオが『デカメロン』の前語りで生々しく記している。惨状のさなかにいた彼はまさにルポライターのように筆を振るった。

「・・・罹病の初期には鼠径部か脇下に腫物ができ、あるものはリンゴくらい、あるいは卵くらいに大きさになり、全身いたるところに広がり、その後黒色または鉛色の斑点が現れ、腫物も斑点も死の兆候でありました。・・・一日千人以上も死んでいきました。墓地だけでは埋葬しきれなくなり、大きな壕を掘って・・・。

田舎では道端で、耕地で、獣のように斃れていきました・・・天譴の過酷な甚だしさは、概算して三月からに七月までに十万の生霊がフィレンツェの城内外で失われました」

ところで、『デカメロン』の小説の部分は敬虔な人たちから不信心だとなじられ、彼自身も恥じて自ら焼き捨てたという。

ペストの大波が去った後の十五世紀前半のつかの間の安定の時、同じフィレンツェでは、修道僧フラ・アンジェリコが修道院の壁に絵を描いた。かの「受胎告知」の画家である。

今、手にしている『ペスト大流行』の著者は以下のようにのたもう。

「・・・ほとんど稚拙とさえいえる一筆一筆に込められたアンジェリコの祈りは、死の淵を見たヨーロッパの魂が、芸術的な美しさを超えた、ひたすらなる信仰の内面に立ち至る瞬間を、鮮烈に

我々に示している。猛々しく荒れ狂う悪疫のあとにぽっかりと空いた静謐な平和と祈りの時間・・・。

ヨーロッパはその後もはやつつましく神の前に首を垂れる謙譲さを二度とその手に握ることはなかった・・・。黒死病の後に訪れた沈黙の祈りこそ、「最後のヨーロッパ」のほんとうの光であったかもしれない」

著者のメッセージが心に浸みる。

報告

ペンクラブの歴史の中で忘れられないメンバーが召されました。

横山麗子姉です。この十月一三日、九一歳の生涯終えてイエス様のみもとに帰られました。

ペンクラブ時代には、童話作家としてまた特にアンデルセンの研究家として何冊も本を出され、大きく活躍されました。

コロナ禍

篠田一志

「父さんは、自粛の影響がないでしょうね」

コロナ禍のなか、巣ごもり中の私に向けた妻の言葉である。

しばらく考えて「なるほど」とうなずいた。

ペンクラブの例会休止、教会での礼拝中止など外出が適わなくなったが、礼拝はインターネットでささげることができたし、前々から宿題だった裏山の雑草駆除が、外出できないストレスの解消に役立ったからだ。

失われたものが他のもので補われ、回復することは嬉しいことだと思った。

だが、この喜びの限界を知ったときがある。まだ信仰を持つ前のことだが、幼い次女の死という事実を突きつけられたときだった。

その後、しばらくして回復の限界と思っていた死からの復活をなさったイエス様に出会い、信仰に導かれた。

それから二十余年の月日が流れた、わたしの中から「回復の限界」の文字がなくなっていた。

コロナ禍は経済も、健康も、人々の生活をいまだに奪い続けている、その勢いはまるで燃えさかる炎のように止まない。

だが、やがてその炎が消え、失われたすべてのものが回復されるときが来ると信じる。

それがわたしの確信であり、信仰なのだ。

主は羊飼い

奈良　ノリ子

去る三月五日、一七年間の牧会をしてくださった新津田沼教会の真嶋威牧師が召天されました。

淋しい思いでおりましたが、最近夢の中で先生にお目にかかりました。

先生がお座りになっている足元に一本の黒い杖が置かれていました。詩編二三篇の『羊飼い　私には何も欠けることがない。あなたの鞭、あなたの杖　それがわたしを力づける』。この御言葉が浮かんできました。先生は長い年月の牧会を通して私たち羊の群れを導いてくださったのでした。先生は障害を持った方にとてもやさしく、差別用語には厳しい方でした。

ある時バスに乗り遅れて祈祷会に遅刻し、奏楽奉仕ができなかったことがありました。連絡するもつながりませんでした。そのことを指摘され、先生の厳格な姿勢を感じました。

先生、ごめんなさい。

無牧の時を経て、私たちは不安の中にありました。それに加えて新型コロナウイルスによる試練も加わり、今までのような礼拝を捧げることが難しくなりました。今は自粛という試練のただ中にあります。

この度、長い間待ち望んでいた新しい牧会者が内定しました。新しい羊飼いの杖に守られながら歩みたいと、切に願っております。

コロナの日々

槇　尚子

初め武漢という地名に胸騒ぎがした。もうずいぶん前、夫は仕事で年間、何度も行き来していた地だ。電話が通じなくて苦労したものである。その地が今コロナ発祥とされ世界中が大騒ぎしている。パンデミック、ロックダウンなど、初めて聞くカタカナ語も身近になった。

週のうち半分以上を外の活動で過ごしていた私は途端に自由の身になった。有り余る時間が与えられた。

教会はちょうど牧師交代の時にあたっていた。今までため込んできた荷物を整理したりとすることはたくさんあった。また奉仕のほうも転出する方の分を誰かが引き受けなければならなくなり、そのことの作業もたくさんあった。

私といえば二人暮らしになってから十年たつ。仕事も卒業し、静かな落ち着いた時を過ごしていた。動ける間は自由にすることとし、互いに干渉しない生活スタイルにどっぷり浸っていた。それが毎日三度の食事をはじめいつも一緒にいるという在宅生活に変わった。慣れるのに数日かかった。

三蜜という言葉が頻繁に聞かれるようになった。人と向かい合って接することが必ずしも良いこととはされなくなった。新しい生き方として、人と密にならずに接せよと言われた。今までにない生き方の勧めであった。

創世記を見ると神は人と人を共に生きる存在としてお創りになったとある。新約聖書においても集まって信じる群れを祝されたとあるではないか。人は人とかかわることによって人になるのである。

東日本大震災の後は絆という言葉がはやった。日本人が大好きな言葉だった。だが今回は個をといわれた。教会も集まることはよしとされず、それぞれ礼拝をひっそりと預かりすぐに帰宅することが求められた。なんと大きな違いであろう。でもリアル礼拝をささげられるだけ幸せというものだ。数人で司式、奏楽、献金係をした。

久しぶりに筆を持ってみた。

我が教会の礼拝看板はいつも毛筆である。担当していた方が転出し、奉仕者が少なくなった。そこで私も名乗り出たのである。

思えば学校時代以来である。母が晩年書道グループに入っていたので家に硯や筆はあったのだが、私はただ見ているだけ、掲示された看板の字を見ているだけで良かった。四月からは奉仕者が足りない。そこで第五主日に当番に入ることにしたのである。自分でも思ってもみなかった奉仕だ。

筆を持つのは何年ぶりだろう。裏紙やカレンダーの裏などを利用して「まず書いてみる」という作業が始まった。鉛筆や絵筆の持ち方とは違う。書くのと見るのとは大違い。縦横の線を引くのはこんなにも難しかったか。習字は最初が肝心だ。こうして午前中の短時間、書に挑戦することとなった。一方昔から「色彩」に興味があった。教会の外の掲示コーナーに何か書けないだろうかと思うようになった。

教会は新型コロナウイルスのため人を集めることができなかった。会員が教会に集うこともできなくなった。こんな時、何か教会で外に発信することはできないだろうか。

その思いから生まれたのが讃美ポスターである。筆で子供讃美歌の一節を書き、周りをコラージュや絵の具で彩る、そのスタイルに思い至ったのである。そうだ、外掲示板に貼ってみよう。

四月、「空の鳥は小さくても」、五月「うるわしき朝も」と、月に一つずつスタートした。教会のそばを通る若いお母さんたちの中には子供のころ教会に行った人がいるかもしれない。キリスト教主義学校に通った人も。そうした親子に呼び掛けたかった。七月の背景はサクランボだ。「主我を愛す」と合わせた。コロナにうんざりしている人々の目に留まってくれたらいいなあと祈りながらの習字であり絵画である。季節はどんどん移っていく。ヒマワリ、コスモス、紅葉と日本の四季は豊かだ。ちなみに紙は全部カレンダーの裏である。コロナ自粛の産物であった。

「主よ、来たりませ」。

キリスト教の歳時記

駒田　隆

おりおりの自然現象や事象を集めて集大成したものに、「歳時記」というものがあります。江戸時代に始まったと言われますが、貝原益軒にも、「日本歳時記」と言う著作が残っています。キリスト教の世界でも、キリスト教に関わる祝祭日や記念日を集めてみると、四季折々の暦が出来ます。それらを集めたものに、『キリスト教の歳時記』（八木谷涼子著＊講談社学術文庫・二〇一六年）があります。その中から、九月、一〇月に係るものをご紹介したい、と思います。

最初にあるのは、九月八日の「聖母マリアの誕生日」です。これは、イエスの母マリアの誕生を記念する日で、クリスマスがイエスの誕生を記念する日であるように、母マリアの誕生を記念して、東方正教会とローマ・カトリック教会では、八世紀ごろから祝っていたとのことです。ヨーロッパ中部にあるリヒテンシュタイン侯国では、法定休日になっています。なお、マリアを生んだ両親を記念する聖アンナ教会がエルサレムの旧市街に建てられています。

また、『マタイによる福音書』の著者と言われるマタイ（イエスの十二弟子の一人。著者説については今日では否定されている）を記念する日が、カトリック関係の教会では九月二一日、とされています。絵画の世界では、マルコは獅子、ルカは牛、ヨハネは鷲をシンボルとしてよく描かれますが、マタイは、人間の顔をシンボルとしています。その名前は、「神の賜物」という意味をもっています。ローマ帝国の徴税請負人だったために、同胞からはあまりよく思われていなかった彼が、イエスに声をかけられて、福音伝道の第一線にたったのですから、これも神の恵みの賜物以外には考えられません。ただ、彼の伝道の生涯については、具体的なことは伝えられていません。

大天使ミカエルの記念日が、九月二九日にあり、カトリック系の教会で祝われています。

ルーテル教会の式文では、「永遠の神、あなたは人の思いを超えたご計画によって、人間と天使を創造し、その役割を定められました」とあります。

ダンテの『神曲』の中でも、天使が、ベアトリーチェと並んで重要な役割をしています。エデンの園を守るのもケルビム（智天使）と言われる第二位に位置する天使（アダムとイヴを楽園から追放した天使）ですが、ミカエルは、第一位の天使として位置づけられており、かっては、日本国の守護天使として崇められました（現在では、聖ミカエル、聖ガブリエル、聖ラファエルの三天使）。ジャンヌ・ダルクに、神の声を取り次いだのも、ミカエルでした。世界遺産の、モン・サン・ミッシュエルの修道院（ノルマンディー）は、ミカエルのお告げによって建てられた、と言われます。また、悪霊と戦う天使として、ユダヤ教やイスラームでも崇敬されているとありました。

なお、九月ではありませんが、一九五五年に、教皇ピオ十二世が、大工仕事をしながらマリアとイエスを養った、労働者ヨセフを祝う日を五月一日として定めています。

一〇月の第一日曜日は、プロテスタント教会の記念日として、「世界聖餐日」があり、これは、一九四〇年にアメリカの「連邦教会協議会」が世界のキリスト者が一致の道を歩むことを目指して始められ、「世界教会一致（エキュメニカル）運動」として、アメリカを中心に進められています。

一〇月四日は、イタリアのアッシジ生まれの、清貧と平和の人と言われる聖フランシスコを記念する日になっています。小鳥にも説教していた、と伝えられる人で、「神よ、わたしをあなたの平和の道具としてください」で始まる「平和の祈り」は有名な祈りです。アメリカの「サン・フランシスコ」の地名は、この聖人の名にちなんでいることは御存知の方も多いでしょう。

一〇月一八日は、福音書と使徒言行録の作者ルカの記念日です。東京築地の「聖路加国際病院」は、このルカの名前にちなんでつけられています。

一〇月三一日は、ルターが始めた、「信仰のみ」、「聖書のみ」、「万人祭司」の宗教改革記念日です。あなたの「教会の歳時記」を作られてはいかがでしょうか？

コロナウィルス日々あれこれ

長谷川和子

三月上旬コロナウィルスのニュースが出はじめた頃、文学大学の説明会に出席した帰り、大宮駅構内で東北物産展をやっていた。多くのかたが群がっていた。密集しているのではないか、その様子を横目に帰宅した。

四月四日は私の誕生記念日。娘の提案で娘の姑と孫三人と徒歩三〇分の城山公園に出かけた。コロナ禍の中、結構家族連れが来ていた。満開の桜の下で持ち寄った食事で、細やかな祝の膳となった。食後、孫たちはテニスを、私たちは語らいの時を過ごした。心地好い風が吹くと花弁が舞い、幸せを感じながら気持ちのよい一時を過ごすことができた（後日公園は閉鎖された）。

五月五日、大学一年のＭ君が娘と共に我が家のガレージの片付けに来てくれた。かつては二台あった車庫は、今や倉庫と化し、亡き母の荷物を汗を流しつつ、仕分けをした。後日Ｍ君はエアコンの掃除をやってくれ、頼もしさを感じた。この月は毎年応募している「童話の花束」に今回も挑戦、文章作りに励んだ。

六月、高齢者の劇団ゴールド・アーツ・クラブから「解散」の案内が届いた。えっ！、そんな！、たしか六月から「吾輩は猫である」の稽古が始まる予定だったはず・・・。たしかに高齢者集団であり、充分な密状態であることに納得、しかし仲間と一言も交わすことなく別れてしまうことは残念でならない。

七月からカウンセラー教室と教会の礼拝が解禁された。都内で集会を持つペンクラブは未だ休会である。

教会は毎年七月に伝導月間と称して、二名の証し者が礼拝の中で話すことになっている。今年は一名のみになり、私が証しすることになった。何を話すか、内容を文章化し暗記することに時間を費いやし、二六日「祈りの力」と題して話をさせて頂いた。

八月「皆さんに会いたい、話したい」だが外食には不安があると言う友人たち（二組）をそれぞれの日に我家に招き、共に食事をし、語り合う時を過ごした。

東京から他県へは控えるようにということで都内在住の息子が九月二〇日に八ヶ月ぶりに姿を見せた。

この時期、散歩とスーパーへ食料の購入以外外出は控え、家の整頓、友人への手紙の発信（三四名）読書などであった。

七月まで桶川は感染者は二名であったが現在は二一名となった。収束には時間がかかりそうである。

コヘレトの言葉（旧約聖書）の中に『すべての人は食べ、飲み、あらゆる労苦に幸せを見出す。これこそ神の賜物である』（三・一二～一三）の言葉に友人達と旅行やランチなど、そのような機会を感謝したものであるが、それが全くできなくなった今、あのひとときが「どんなに大切な時間であったか」としみじみ思わされている。

「コロナ太りになった」、「コロナウィルスが怖くて夜眠れない」等々の友人からの電話に、光の見えない環境に心細くなるのも頷づける。

しかし私たちは神様を信じる者として『あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主が成し遂げてくださる』（詩篇三七・五）と祈っていきたいものである。

新入会員のお知らせ
福島県二本松市在住の本田真貴さんが入会されました。コロナ禍の中での恵みに感謝し、心から歓迎します。

主イエスにある希望

本田真貴

初めて寄稿します。福島県在住の本田真貴（まき）と申します。二八才で受洗し、今年で二二年目を迎えました。受洗のきっかけは、求道中に福島市内のＦ教会の夕拝に出席して、創立百周年記念礼拝が二週間後であると知りました。翌日み言葉「イエスキリストを深く知って世の汚れから逃れても、それに再び巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような者たちの後の状態は、前よりずっと悪くなります」（第二ペテロ二・二〇）が示され、さらにこれがジョン・ニュートンの回心のみ言葉であること、マザーテレサの召天日が百周年記念礼拝と一日違いであることを示され、御心と確信しＦ教会の百周年記念礼拝にて受洗しました。その後家族も救われ、昨年は伯母も病床洗礼を授かり天に帰りました。

ＪＣＰとの出会いは昨年の「百万人の福音」の広告を見て、ＨＰを開いたことから始まります。三浦喜代子さんに著書を注文したことから、いろいろ教えて頂き、独学で童話を学んでいること等相談して、五月に例会に出席いたしました。ＪＣＰの掲げる第二コリント三・三『あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています～』は一八年前に示された大切なみ言葉であり、これが入会する決め手になりました。皆様どうぞよろしくお願いします。

昨年一二月末、中国湖北省武漢で発生した新型コロナウィルスは、瞬く間に世界中に広まり、世界での死者数が百万人を超えています。このような大規模なパンデミックの中でも主イエスは揺るがぬ岩として私と我が教会を守って下さっています。以下、第一波が来て緊急事態宣言が発令された時のＦ教会の働きを書き記します。

四月七日に、七都府県に緊急事態宣言が出され九日に私の住むＮ市内郵便局でもクラスターが発生しました。一二日のイースター礼拝は礼拝堂で守られましたが、一六日には緊急事態宣言は全国に拡大。そこで、Ｆ教会は礼拝堂での礼拝を中止し説教をメールに添付した音声データで配信することになりました。この方法が可能になったのは、Ｆ教会のＴ牧師の次女のＫ牧師が秋田から九州への転任前一か月間、Ｆ教会に滞在していたという備えがあったからです。神様の奇しき計らいを感じます。Ｆ教会のＴ牧師は七〇歳を超えておられ、お一人で教会を守っておられました。次女のＫ牧師の支えによって、週報をメールし、説教を音声データで添付配信され、五月二四日まで家庭礼拝は続けられました。ＰＣ環境がない方々にはカセットテープで説教が回され、週報はＦＡＸで送られました。また近くの数人の信徒は礼拝堂に集い、Ｔ牧師はさらに説教をされておりました。録音などで三回は説教され、大変な負担だったに違いありません。そのおかげで我が家では母が司会し、私がオルガン奏楽をしてスマホで説教を聞くことができ、大変恵まれました。

Ｆ教会は今年創立百二二周年を迎えましたが、このように家庭礼拝という形でも礼拝が途切れることなく続けられたことと、そのために尽力された牧師の働きに、イエス様がどんな時でも揺るがぬ岩であり、恵みの水を与えて下さる希望の方であることを思いました。

五月三一日のペンテコステ礼拝から、教会での礼拝が復活し、現在は説教壇と司会席にアクリル板で仕切りを設けて、体温を受付で測り、三密を避けて短時間で礼拝は続けられています。

このようにウィルスの感染を防止していますが、私は毎日の世界の感染拡大と死者数を見て、終末が近いのかと怖れておりました。しかし、イエス・キリストを信じる者にとってこの苦難は、罪に対して受けるさばきではなく、清められるための訓練なのだと「コロナウィルスとキリスト」（ジョンパイパー著）で読み、希望を持ちました。（ヨハネ五・二四、ローマ八・一）

初代教会が疫病の襲う中、献身的に病者を看護して神の栄光を現したことを思い、私もこの病が食い止められ、治療薬が授けられるように祈り続けたいと思います。コロナ禍においても、ＪＣＰの皆様のご指導のもと、主イエスにある希望を証ししていきたいと願っています。

コロナ禍と読書から　維新の人物エッセー
磯永彦輔（長沢鼎）薩摩藩英国留学生と信仰

三浦喜代子

今年二月ごろから始まった新型コロナウイルスによる感染症はまたたく間に世界中を飲み込み、赤子から高齢者まで一人のこらず危険にさらされている。政府や自治体から発信される生活様式に従わざるを得ず、私の日常も揺さぶられた。自粛を強いられたが、案外よいことも多々発見、その一つは読書時間が多くなったことである。

この際、今までにない分野を読んだ。幕末から明治初期にかけての人物伝を読み漁った。その中の一人を紹介します。

幕末の一八六三年一月二〇日（四月から慶応に改元）、薩摩藩は英国に留学生一五名を含む一九名の外国使節団を派遣した。当時はまだ鎖国時代であるから公には禁を犯しての密出国である。見つかれば刑罰を受ける。しかし幕府は渡航を禁じていても、維新を迎えるこのころになると、倒幕を企てているような藩は、幕命も無視である。現にこの使節団はロンドンで長州藩の一団に出くわすのである。しかし薩摩のような大規模な使節団はなかったという。七七万石の大藩薩摩は独立国のような気概を持っていた。

留学生一五名は藩の洋学校「開成所」の学生たちであった。一五名をじっと見ると、馴染みの顔が二、三人見える。以前からうろ覚えの森有礼を見つけた時は遠縁の従弟に出会ったように心が躍った。若干一八歳であった。

留学生の中に磯永彦輔（別名長沢鼎）と言って一三歳の少年がいた。彼の一生が深く心に残った。読んでいるのは『薩摩藩英国留学生』（中公新書）である。

磯永は代々洋学者の家に生まれ育ち、幼いころから〈てんがらもん〉利口者として、藩内に知られた優秀な学生であった。わずか一三歳で留学生として選抜されたことは一族の栄誉であり、彼自身、並大抵の喜びではなかった。渡航への恐れなどみじんもなく意気揚々として加わった。純粋そのもの、希望の塊であったのだろう。

ロンドンに到着したのは五月二八日、四カ月の旅路であった。留学生たちはロンドン大学へ入学したが磯永は年少のため、一人スコットランドのアバディーンへ旅立った。何と勇敢であろう。森有礼は兄へ「彼は剛気の人で末頼もしき人」と書き送っている。

二年後にロンドンに戻ったが、森有礼たち六名とアメリカへ渡った。彼らはＴ・Ｓ・ハリスのキリスト教共同体へ入植し厳格な宗教生活を送るのである。その後森らは維新の祖国へ早々に帰国するが、磯永は一人残った。またもやたった一人、今度はアメリカに残るのである。なにが彼をとどめたのだろうか。わずか一七歳の、まだ少年ともいえる磯永の心中を固く支配するのは何であろうか。

著者は説く。

磯永は他の学生から隔絶されてスコットランド人の中で生活するうちに「信仰心」をもつ西洋的な人間になり切っていた。彼の「信仰心」は藩への危機意識を忘れさせたのだと。

信仰共同体はまもなく解散してしまうが、磯永はハリスとともにカリフォルニアのサンタローザに移り、理想的な農園建設に着手し、ぶどう園を開き、ぶどう酒醸造も始めた。

ハリスの死後この「地上の事業」は磯永が全遺産とともに引き継いだ。磯永はさらに広大なぶどう園を開拓し「ぶどう王」の異名をとり「サクセスワイン」の名でアメリカ、ヨーロッパ、日本にも輸出したという。

晩年にはぶどう園は周囲二〇キロ、使用人三〇〇人、その資産は当時二千万ドルと言われた。アメリカ永住の先駆者として在留邦人だけでなくアメリカ人からも畏怖と尊敬の念を抱かれていた。

磯永は維新を体験していない。森有礼のように帰国して祖国改革の一助として身を挺しようとは思わなかったのだ。薩摩弁と英語しか話さない磯永は生涯独身を通し、幕末、明治、大正、昭和と四代を生き抜き、昭和九年、農園の広大な邸宅で八三歳の波乱の生涯を閉じた。磯永は「信仰心」による自分の居場所を真に知った人だったと思う。

感謝に代えてくださる日まで

西山純子

笑顔になりそうな優しい穏やかな彼の寝顔だった。「ノン、ごめんね」と、午前五時過ぎに病院からの電話でタクシーを呼び娘と乗り、着いてすぐ出た私の言葉はコロナのためとは言え、一人で天に旅立った彼に対する詫びであった。

「ううん、どうした？」と案じてくれるような彼の顔に娘と変わり合って「大好き」という代わりに髪を撫ぜ、頬を寄せた。

電話を受けた折の私は、鈍い乳白色の思考回路のわりには教会役員のＡさんにテキパキ報告し、葬儀社の電話番号を聞き、必要事項の依頼を済ませていた。

院長は詫びてくれた。看護師は「優しいお父さんだったのでしょうね。いつも、ありがとうと言ってくださって」と、言葉をかけてくれた。

「お世話になりました」私の口から出た言葉は確かそれだけだったと思う、

葬儀社から二人来院、手際よく丁重に温かく乗車させてもらい、院長と大勢の看護士が見送ってくれる中を黙礼、深々と感謝の頭を下げて娘と二人ひと言も語らず帰宅した。兆度、東京市街から着いた息子夫婦と共に、夫をベッドに寝かせてもらってから、葬儀の事務的な話を淡々とした。

コロナの渦中であったから家族葬と決めた。

牧師不在中であったから（前牧師は前月召天されていた）代務者の牧師に司式を依頼することも決めた。

一晩だけ、彼は私たちと共に過ごしてくれた。「お父さん。いいお顔だね」、「お父さんハンサムだね」、「お父さんありがとう」。私たちは殆ど彼の傍を離れることなく、翌日の昼過ぎまで家に居てくれる彼をひたすら慈しみ愛した。それだけが私たちに出来ることだった。

葬儀には教会役員方が大勢出席くださり、コロナ禍のため何方にも出席をお断りしたのだが、おお一人だけ「申し訳ないが受付に少し置いていただくだけでも」というお願いをいただき断り切れずにご出席を願った。感謝であった。

家族葬の恵みで献花の前に孫たちの奉唱が為せたことは嬉しかった。夫の大好きなフォーレのレクイエムから「ピエ　イエス」を捧げられたことは大きな慰めとなった。

孫たちの初体験の教会での葬儀、身近な祖父の死に際し、伴奏と歌を二人の孫によって捧げられてことが心に深く刻まれる感謝となった。

コロナは小さな私たち家族に、大きな災いとなった。毎日会いに行き、食事の介助をしていた娘と私の足を不意に中断させ、禁止させられてしまった。泣いても叫んでも規則は規則、たまに看護士に電話で様子を聞くだけの日々となった。

私の心身は日に日に衰え、弱っていった。

葬儀から集骨に至るまで私は声をあげて泣くことはなかった。堪えてこらえて娘、息子たち、孫たちが初めて体験する身内の教会での葬儀が感謝なものであり証となるものと、どこかで確信していたのであろうか。火葬場で牧師の祈祷の後、最後に棺の彼の顔を見たとき「ありがとう」と私は言った。孫たちもそれぞれに、そう言った。

後の事務処理は、多々あった。彼の私が萎えないように残してくれた仕事として、寧ろ元気にこなした。やがて少しずつ時間が与えられた。

夜、眠れなくなったのは、かなり以前からではあったが、さらにひどくなり、朝の目覚めは鈍く重い頭と悲しみの器に入っているようで、私はベッドの傍らに居る彼の笑顔の写真を見て声をあげて泣いた。食事中にもふと、彼が好きな食事を思うと泣いた。何も思わなくても泣いた。拭っても拭っても涙は止まらなかった。娘が一緒の時は、声を出さずにこらえて涙を流した。鼻ばかりかんでいた。

コロナの被害者だと、恨んだこともあったが、今は神のご配慮とおぼえる。この時期だったから私は彼をこれほどに慈しみ愛し、優しい彼が「もう、ゆっくりしてね」と、苦しい様子も見せずに、ひっそりと天へ還って行くよう導かれたのだと感謝の思いになりつつある。

神は共に居てくださったのだ。

神さまから与えられた道具

山本千晶

「これから、どうなっていくのだろう」。

二月の末、私はテレビや新聞から飛び込んでくる新型コロナというウィルスの猛威に脅えていた。人と気軽に会話すること、歌うこと、つまり声を出すことにより侵される危険が高まるウィルス。ニュースからは未知の病への不安が高まり「してはいけないこと」へのチェックをし始めている自分がいた。

全国規模での自粛期間が始まり人混みを避け、食料品の買い物の際も「消毒、消毒」と日々の生活に消毒液が欠かせなくなった。マスクも手放せなくなった。しかも、その品々が手に入らなくなる日が続いた。

教会の礼拝、クワイアの集まり全てがストップした。在宅の時間が増え、テレビや新聞からの情報に恐れを抱き、生活のリズムがガラリと変わっていった。不安な情報に囲まれながら月日だけが過ぎていった。桜の頃になり、やがて新緑の季節を迎え始めた頃だった。

世の中はウィルス騒ぎで全く変化が見られないと思われる中、気づくと一日中自由な時間が与えられ、自然の中を散策する日常へと変わっていった。新緑を楽しみ公園や水辺に咲く小さな花々に目を遣りながら、離れている友人たちとの電話での会話を交わす時間も増えだした。しかしテレビではあいも変わらず不安を駆り立てる言葉が溢れていた。

やがてそれらの報道の姿勢に違和感を覚え始めた。友人たちとの会話からインターネットを通しての情報を知り、私は落ち着きを取り戻した。インターネットの情報は様々な見解に溢れていた。それまで得た報道からの違和感が取り去られていったことに気づいた。

そんな時、二〇年ほど前に耳にしたある神学者のことばを思い出した。

「インターネットは神さまが私たちに贈ってくださった福音の道具になっていくことでしょう」。

神さまは私たちに安らぎを齎して下さるお方、不安を煽る世の中から私たちの魂、霊を守って下さるお方だ。

コロナ禍によって与えられた時間は「大切なものとは何か。今、どういう方法で大切なものを知るか」と気づく機会になった。礼拝もインターネットを使用して捧げることができるようになった。クワイアの集まりもネットを試みた。

やがて自粛期間が解除され六月中旬には礼拝が、七月初旬にはクワイアの集まりが再開できた。それぞれに人数制限や消毒等々、まだ未知のウイルスへの警戒を続けつつの再開であった。不自由さを感じつつ集まる私たちだ。

しかし、そこにはお互いの存在を再確認することができた喜びがあった。今、出来ることを感謝しあい、こうして集まれることが当たり前ではないこと、ひとときひとときを大切に過ごす思いが生まれていった。ただそこにいられる、それだけで嬉しい。どの顔にも感謝の思いが深められていった。

今も未知のウィルスへの警戒は緩めることはできない。私の日常は神さまが与えてくださったグッドニュースを探し求める日々へと変えられていった。許されている範囲での人との交わりにおいて、互いに希望に向かって歩んで生きていくために情報を交わしあいつつ歩んでいる。この状況の中をどう生きていくのか、絶えず問いかけてくださる神さま。

コロナ禍での効用のひとつに、テレビという媒体を通してだけで情報を得ることには限界があることを知った。

今、心落ち着く映画やドラマを観るためにテレビの前に座る私がいる。

さようなら　マリン

山角正子

九月一六日、ヨークシャテリアのマリンが亡くなった。突然死に近かった。急に呼吸が荒くなったため、動物病院に入院して四日目のことだった。肺血栓閉塞症が死因だろうという見立てだった。肺から離れた場所で作られた血の塊が肺の血管に入り込み、血流をふさぐ病気で死に至ることが多いらしい。

遺体は白いバスタオルに包まれて帰宅した。両手を前でそろえ、鼻は黒々と光り、わずかに開いた目は優しさと寂しさをたたえ、毛並みはつややかだった。一四歳（人間でいうと七二歳）とは思えない若々しい姿だった。

外見だけでなく、これまでずっと健康で元気だった。三週間前には、犬同伴可のキャンプ場のコテージに一泊し、豊かな自然の中を孫と一緒に楽しそうに走り回っていたのに。

とても内気で、小心者だった。散歩のときに通りすがりの犬が親しみをこめて近寄ってくるとさりげなく逃げる。出会った人が声をかけると、ぶるぶる震えて小さくなる。真夏でも「あら、この子寒いのね」と言われる始末。それほど気の小さいマリンだったが、撫でてもらったり、声がけをしてもらううちに、近所の子供たちには慣れてきていた。コロナ禍で保育園・幼稚園・小学校が休みだったときには、子供たちとほぼ毎日散歩を楽しんだ。十人くらいの子供たちと見守りの大人三人くらいが小さな犬を中心にして歩く姿は、人目を引いたのに。

帰ってきたマリンを、ケージの前に敷いたマットの上に横たえた。孫は家族の絵と仮面ライダー三体をマリンの周りに飾った。そして「リンちゃんは、明日の朝には目を覚まして元気に走り回るよ」と言うのだった。

翌一七日、ペットの葬儀屋さんに来てもらい、家族四人でお別れをした。白い布・レースが内部に張りつめられた小さな棺の中のマリン。手に庭の花束を持ち、家族との写真に囲まれて花嫁さんのようだった。孫の号泣と私たち大人の涙に送られて出棺。

二時間後、マリンはお骨になって戻ってきた。孫は「毛や尻尾はどうしたの？」「天国で元気にしているよね」「仮面ライダーにお願いすると、好きなものになってこの地上に戻ってこれるのだって」とつぶやく。昨日マリンの周りに仮面ライダーを置いたのは、仮面ライダーパワーで生き返らせてほしいという願いだったのだと分かった。

初めて死に直面した孫に寄り添いたい。何と言えば良いのか。「天国で楽しく遊んでいるよ」「姿は見えなくてもいつも一緒にいるよ」とでも言えば良いのだろうか。

受難の時、恵みの時

佐藤　晶子

日本クリスチャンペンクラブの定例会が、二〇二〇年一月二五日にあるので、高速バスやホテルの予約をして臨んだ。東京ドームで毎年この時期に行われている『東京国際キルトフェスティバル』にも足を運びたいと思い、千葉県に住む友人と約束をして、例会前日に久しぶりの再会を果たした。

彼女はパッチワークを趣味として楽しんでいたので、よく相談をさせてもらっていた。あまり一生懸命にやったという記憶はないけれども、愛着のある古着の綺麗な部分を使って何か作れないかと、いろいろなアイデアを探る機会の一つとしてキルトフェスティバルを毎年楽しみにしていた。

その上、今年はテーマが音楽というので、どんな展示物が並ぶのか、音楽が趣味の私はかなり前からワクワクが止まらなかった。翌朝は御茶ノ水駅へはひと駅のドームのそばのホテルを予約した。

中国は春節の時期で、日本に来る中国人の観光客は多いと聞いていたので、混雑は覚悟していた。いつもの年よりも入場者が多かったような気がした。混雑していて、展示物を見るのにも時間がかかった。それでも見に行った価値はたくさんあって、音楽と手芸の関わりを多く感じ、有意義な一日を過ごせた。中国の人達も楽しんでいたに違いない。

それからしばらくして、オカリナを楽しんでい

た私に、激痛が走った。東日本大震災の後に、オカリナが友達になって、たくさんの人の前で演奏ができ、不安から解放されて来たが、このコロナ禍の中では感染症予防のためには控えなければならず、自宅での練習さえもままならない私は、肺炎ではないけれど胸が苦しくなったのである。

讃美歌も大きな声で歌えない。まるで暗闇の長いトンネルに入ってしまったようだ。

同時に音楽で生活している友人達がとても心配になった。コロナ禍はいつ終わるのだろう。ニュースにも報道されない困難がたくさんあるのだろうと考えさせられた。

神様は私達に試練を与えられる。それは死ぬほど辛い試練かもしれないけれど、必ず逃れの道も示してくださる。

『起きて、子どもとその母親を連れて、エジプトに逃げ、私が告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている』(マタイ二・一三)

今こそ、主が示された道を歩む時かもしれないと思う。音楽がテーマのキルト展は、私を助けてくれようとする主の導きだったのかもしれない。クリスマスの出来事は、昔だけではなく今にも通じているのだ。

五月中旬に千葉に住んでいる娘に女の子が産まれた。初孫である。コロナ禍の恵みである。初対面の日を楽しみにしている。

再会の時まで

山本披露武

八十歳代も後半に入ると、いつこの世を去る日が来ても不思議ではない。それだけに、一日一日をもっと大切に・・・なんて思っていても、コロナ禍で八ヶ月以上も籠の鳥生活を強いられ、しかも、それがいつ終わるのかが分からないというのではストレスがたまって、一日が終わるころになると、

「やれやれ、ようやく今日も終わったか」

と言いたくなってくる。いや、言いたくなるのではなく、毎日言っているのだ。

そのような、退屈でうんざりしていた八月のある日に、何とも不思議なハガキが送られてきた。一度も会ったことのない人から、「住所が変わりました」という、写真付きのハガキなのだ。が、その転居先が、天国だというのだからたまげてしまった。

学生時代に一人、ハガキをくれた人と同姓の友人がいた。しかし、名前が違っているし、顔も違うのだ。三十年近く会っていないので、もしかしたら顔まで変わってしまったのだろうか。

そう、思って、何度も写真を見なおしたが、やっぱり、全くの別人である。

その天国在住の見知らぬ人が、

「後に残して来た妻がさぞ寂しがっているのでは

と、少し案じてはおります・・・」

などと書いてよこすのだから、いよいよ、わからい。

そんなこんなで、頭をひねりながら読み続けているうちに、ようやく、今年の四月にご主人を天国に送られた、ペン友のＮ姉が、ユーモアを交えて書かれたハガキだったと分かって、目頭が熱くなり、しばらく読むことができなくなってしまった。特に、その後半に書かれてあった、

「眠れなくて毎晩泣きました。目が覚めると泣きました。ふと思うと泣きました。書いていると熱い涙が・・・」

といった個所などは、とても涙なしに読むことはできなかった。

でも、それほど泣けるということは、ご主人との生活が、本当に幸せだったということではないのでしょうか。

「Ｎさん、あなたは物凄く幸せだったんですよ。だから、そんなに泣けるのです。その日がいつかは分かりませんが、あなたは必ず、天国でご主人に会えるのですから、それまで淋しいでしょうが頑張ってください。

では、またね。サヨウナラ」

なくてならぬもの

安東奈穂美

今年の三月二週目から、教会でもコロナ対策が始まり、礼拝以外の集会は休みとなった。

私は聖書クラスを担当していたが、参加者に感謝の言葉も伝えられないまま年度が終わった。

ステイホームといわれる中、もともと人混みが苦手で読書好きの私は、ふだんとさほど変わらない生活を続けた。

それでも、感染拡大を防ぐため、手指の消毒には神経質になった。また、マスク不足が叫ばれると、手持ちの物をいかに長持ちさせるか考え、気づけば常にマスクを捜すようになっていた。不安な気持ちがじわじわと広がっていった。

まだ肌寒い北関東の春。私は歯科通いを始めた。車で歯科に向かう途中、遠くに筑波山が顔を見せ、道の両側に街路樹が長く続く道を通る。大きく広がる空に葉のない枝が伸びている。そんな景色を見て、ふと解放感を味わった。やはり心が疲れていたのかもしれない。

何度もその道を通るうちに、いつしか樹々に淡い緑がさしてきた。陽射しが温かみを帯びると、その緑は濃さを増し、葉も繁ってくる。命は着実に育っているのだと感じた。

同じような毎日を過ごしている私も、この自然界に生きる一人だ。息を吸って吐く。神に創られた体は、常に血液を循環させ、私の命を繋いでいる。神のわざが現れていることを感謝した。

家族以外とは話さない日々が続いたある夏の日、教会の婦人会からメールがきた。短い時間で集まって、近況を分かち合い祈りましょう、というのだ。

感染対策を万全にして参加した。参加者が、今の気持ちを話した。私は話すうちに心が高揚してまとまりがなくなった。でも、皆、優しくうなづきながら聞いてくれる。ああ、私が求めていたものはこれだったのだ、と発見するような思いがした。一人ずつ祈る時、「今、神様の前に出るのが怖い気持ちです」と涙ぐみながら祈る人もいた。胸に熱いものがこみ上げつつ、私はこのような正直な祈りをしているだろうか、と心を探られた。

四月から新たに参加していたクラスでは、毎週、各自で学びをし、メールで応答するスタイルを続けていた。聖歌隊その他の活動が休みなので、気を散らすことなく学んでいる。自分の内にある自己中心性や、思考の癖にも気づく機会である。

今、私は誰にとがめられることもなく、母国語で聖書を読める。そして、全知全能の神に「お父さん」と話しかけるように祈ることができる。なんと幸いなことだろうか。

自分の状態やまわりの環境がどのように変わろうとも、「祈りとみ言葉」を大切に生きていきたい。賛美の歌を口ずさみながら。

箱舟で見る夢

島本耀子

今年は新型コロナウィルス発生で、思いがけない外出自粛令まで出ました。パーキンソン氏に居候されて外出は少ない私ですが、病院行きは別です。国道には、空いたバスが定刻通りに来て、感染懸念の人を受け付けない病院にも安心。分からない事は神様に委ねて、日々を送る私たちは、箱舟のノアと同じかなと、ふと思いました。

ノアの時代はアダムとエバから十代後。地上には悪いことを考える者が増え、悪が満ち満ちて乱れた世でした。神様は心を痛め、人を創造したことを悔やみ、雨を降らせて大洪水を起こし、人も動物も全て消し去ろうとされました。

しかし、ノアとその家族、一つがいずつの生き物たちだけは助けようと、神様はノアに、木で箱舟を造れと命じました。ノアだけが、神様の御心にかなう正しい人だったからです。

旧約聖書創世記第六章には、「ノアは、その妻と、三人の息子とその妻たちと、箱舟に入り、生き物たちも来て、入った」と、あります。彼らはみな、むりやりにではなく、神様に導かれてきたのです。食料も忘れません。天地を創られた神様に手落ちはありません。

三十数年前、「箱舟の残骸発見」を新聞記事で知り、よほど堅固な船に違いないと、早速調べてみ

ましたが、当時は便利なネットの検索はなく、聖書の記述だけが頼りでした。

箱舟の寸法(キュヒトはメートル法に換算)
長さ・一三二㍍　幅・二二㍍
高さ・約一三㍍　三階建て・多数の小部屋
腐蝕と水漏れを防ぐ効果のある塗料
「瀝青」天然のアスファルト・タール・ピッチなど、黒色の粘着性のある物質の総称。
「塗るもの」は、聖書により訳が違う。
古い文語訳では「瀝青」に、「ヤニ」のルビ。
以下「アスファルト」「タール」「木のヤニ」。
「瀝青」を調べた辞典の名は忘れましたが、わずかながら自然界にある「塗るもの」を一くくりにした言葉なので、これらはみんな正しいのです。すばらしい神様の創造物です。必要なものをノアに教えた神様は造船にもそれとなく、御手を貸されたかもしれません。

雨は四〇日四〇夜の間降り続き、深淵の源も裂けて洪水が地上を覆いました。山々も水没し、箱舟は地上から離れて水の中を漂いました。地上の生き物たちはすべて死に絶え、箱舟の中のノアたちと生き物たちだけが生き残ったのです。水は一五〇日の間、勢いを失ないませんでした。水が減り始めてからやっと、箱舟は高い山の天辺に止まりました。アララト山です。

雨が降り始めて大洪水となり、水が引いて地が乾くまで約一年経っています。その間、神様は箱舟の中の人や生き物たちに心を留めておられました。平安で静かな船内は、夢を見ながら冬眠する生き物がいたかもしれません。

家に籠もりがちな私も、薬の副作用でよく眠ります。それが箱舟の中であったら、屋根が開いたときに見るものは楽しみです。

ノアたちは再び地上に戻ることが出来ました。ノアは真っ先に祭壇を築いて、神様に感謝を捧げました。神様は、生めよ、増えよ、地に満ちよと、ノアたちを祝福して、二度と再び、大洪水で大地を滅ぼすことはするまいと、契約の虹を立てました。虹は、地の上に雲を湧き起こして現した、神様の約束のしるしなのです。

洪水で、「ノアの方舟」が流れ着いた「アララト山」は、トルコにある標高五千メートルを超える火山。一八〇〇年代に大規模な火山が起きた後、発見された遺跡を、度々の調査で、箱舟の存在が裏付けられ、ついにトルコ政府は、公式には認めようとしなかったそこを「ノアの箱船国立公園」に指定したそうです。

ここが、歴史の事実として、世界中に認められるのはいつでしょうか。

コロナ禍　一旦停止の中で礼拝を続ける

山本悦子

聞いたこともないコロナという疫病は、快楽、美食、物欲など、とどまるところを知らない生活のすべてをストップさせました。

神様は、一度止まってみて、静かに生活を考えてみよと勧められ、一旦停止をかけられたのではないでしょうか。

あゝ神様、地球を、世界を、日本をあわれんでください。罪を悔い改めます。物を大切にします。謙遜になります。しかしコロナはもう半年以上も続いており、神様は応えてくださいません。

しかし神さまはすべてをストップされたわけではありません。礼拝を続けよと細きみ声で囁いています。このような時に何もしないでいいのか、困難な時こそ神のみ心を求めることではないのか、どんなときにも礼拝を止めてはならない、礼拝を続けよと。

神様のみ声に目覚め、たとえ一人でも礼拝を厳守しようと心に決め祈るうちに道が示されてきました。何回かはメッセージを送って礼拝を続けました。これは牧師にも信徒にも得難い経験になりました。時がよくても悪くても礼拝を守る習慣がしっかり根づき、礼拝が祝福されました。

コロナ禍の中で一度も休まず続けられた礼拝の恵みをしっかり持って、今後も何があっても続けることができるでしょう。

天国へのお部屋へ・横山麗子姉召天によせて

長谷川和子

十月一三日、朝T氏より電話があった。

「姉が今朝亡くなりました。九一歳でした」。

何時かこのような日が来るとは思っていたがやはり衝撃であった。

横山麗子姉はＪＣＰのメンバーであり、当時は役名こそなかったが、「ナンバー2」の存在であった。厳しい故満江理事長にあのおっとりした構えで満江先生の激昂を上手く交わしつつ、心優しく仕えておられた。

一人暮らしが難しくなって、私の勤務するホームに体験入居されたのが七一歳のとき、そのまま入居されて一八年。南向きの二間続きの部屋で過ごされ、「ご機嫌いかがですか」と訪ねると、「あら、長谷川和子さん最高よ」とあの美しい声で仰しゃり、いつも明朗で入居者や職員等に愛されていた。ホームが上尾から北浦和に移転して一年後に私は定年を迎えた。

その後も時々訪ねていたが徐々に口数が少なくなり、十年後の昨年、浦和西部病院に入院。見舞いの度に枕元で賛美歌を歌うと口を動かして、一緒に歌っているかのようであった。

横山姉は地上の務めを終え、安住の地、天国のお部屋へと旅立ったのだ。数々の思い出を感謝すると共に、長年支えておられた妹のT氏の労に頭が下がる思いである。

麗しい人生　横山麗子姉を偲んで

山本悦子

麗子さんの名の由来は生まれたのが五月二日という日本の季節で一番爽やかな麗しい日だったからと聞いています。姉妹は晩年「晴れた空、そよぐ風」をよく歌われ、私もつられて口ずさみました。

半世紀以上も前になりますが麗子姉と私は同じ教会に属し、嬉々として奉仕に励む間柄でした。当時は物資が今ほど豊かでなったころですし、麗子さんは心の渇きを癒すために強烈な美への憧れを抱き駆り立てられたのでしょうか、フラワーカード製作へ進んで行きました。美しい絹の布を探し歩き、見事なカードが次々に完成し多くの者が魅せられました。ぶどうの実のグラデーション、カトレア、忘れな草、マーガレットが生き生きと描かれました。これがクリスマスカードへのきっかけになり「レイコカード」として世に出て行くのです。麗子さんの類まれな才能が生み出したのです。

このカード事業を麗子さんは教会に譲り、会堂建築のため大きな貢献をしました。教会は財政的にもうるおい、会員数も驚くほど増していきました。麗子さんはお金には興味がなく、いつも天を仰ぎ、星が、月がきれいという少女のようなところがありました。

教会で活版印刷が本格化し聖徒新聞が発行され、麗子さんは編集を担当しました。やがてそれがＪＣＰでの働きになっていきます。ＪＣＰでも大活躍をされ、満江先生を助け、家族ぐるみで文書伝道に参加されました。そのころの麗子さんは本当に輝いていました。また童話作家としても活躍し、とくにアンデルセンの研究に力を入れ、デンマークまで取材旅行をされたこともあります。

教会職員として活版印刷に励んでいた私たち若者は、時に徹夜に及ぶこともありましたが、麗子さんは肩をもんだりお猿さんの真似をして鼻の下を長く伸ばし私たちを笑わせ慰労してくれました。さすが学生時代は演劇部員だった麗子さんの演目の一つになったのでないかと・・・。九一年の生涯は大きな喜びや悲しみで満ちたドラマチックなものだったのです。

爽やかな初夏に産声を上げ、二〇二〇年殊の外暑かった夏を送り、山々は紅葉に染まり美しく深まり行く秋に天国に旅立った麗子さん。絵にも歌にもなります。いつでも人のため教会のために尽くされた麗子さん。ご両親、姉上との再会にウキウキしていることでしょう。

麗子さんを語るに忘れてならないのは妹さんの廸子さんのことです。麗子さんを見舞う車中では「老々介護ですよ」と愚痴ではなく笑顔で話され、長い間言葉に尽くせないご苦労があったと思います。麗子さんありがとう。廸子さんありがとう。主が疲れを癒してくださるようお祈りいたします。

編集後記

篠田一志

新型コロナの感染拡大によって、多くの人たちは不安と戸惑いのなかに置かれた。

そんなコロナ禍の中でも、キリストの光を見た者の口から出る言葉は喜びであり、感謝の言葉であった。

四一号はその「驚き」の特集だと思う。

驚きといえば、先日裏山の雑草を駆除した後に次の写真が与えられた。

ニホンカモシカが餌を噛んでいるところで、自室からの撮影である。

東京・青梅に住んで三十余年、はじめての出会いであった。

カモシカの餌場が今まで雑草で隠れていたのか、わからないが、これもコロナ禍で与えられた驚きだと思った。

後記・コロナ禍の「あかし文章愛」

三浦喜代子

二〇二〇年一月二五日、私たち関東ＪＣＰは御茶ノ水ＯＣＣの一室に集まって、年の初めの例会を開催し、新しい年への抱負などをこころ楽しく語り合った。まだコロナのうわさもひとごとで、三月末の次回を疑わなかった。ところが二月早々にクルーズ船の騒ぎが持ち上がり、一三日には国内初の死者が確認された。

二月末に「童話エッセーの会」を予定していたので躊躇もしたが決行。わずか三名であったが。それが最後になった。三月例会中止、五月中止、七月中止、九月も中止した。部屋はすでに一年分予約してあるので、キャンセル、キャンセル、またキャンセルであった。

「非常事態宣言」が発生され、全国ひっくるめて不要不急の外出自粛要請が出され、街から人影が消えた。ＧＷも夏休みも吹き飛んだ。

その中で「私とコロナ禍」をテーマに、「文は信なり四一号」発行に励むことにした。今でしか書けない、今だからこそ書けるとの「あかし文章愛」が熱く燃え、今号の生みの母になった。

メンバーの皆さんとはメールなどの通信を通して安否を確認し合った。今も。それぞれが新しい生活様式を厳守し工夫しながら無事にお暮しとの報をいただき、主を崇めたことであった。

コロナのゆくえは神さまの御手にゆだねます。

373 頁・1800 円

二〇一九年五月に、二年ぶりに証し作品集『百花繚乱』を出版しました。二〇一〇年からスタートした並列四字熟語をタイトルに冠したシリーズの第五巻目です。過去に『花鳥風月』、『喜怒哀楽』、『春夏秋冬』、『山川草木』の四冊が生み出されました。

『百花繚乱』には「21人の自分史」という副題がついています。執筆者たちは日ごろから「あかし文章」に取り組んでいる同志です。あと少し残部がありますので、ご入用の方は事務局までご連絡ください。

クリスマスプレゼントにお用いください。

★本誌「文は信なり」は関東ブロックが年二回ほど発行しています。HPにも掲載します。（誌代一〇〇円）。なおHPには例会他活動や会員の作品が多数掲載されています。御高覧いただけたら幸いです。URLはトップページのヘッドにあります。